

「教材からの離陸」という教育の原点

日本国語教育学会会長 倉澤 栄吉

教材からの離陸というのがなぜ教育の原点になりうるのか

教材は一般に固定的な観念を装っています。教材はそこに存在している。まず教材が存在するぞ、存在しなければ教育は出来ないのだ、と言うかのような観念が「教材」にまつわりついている。

そういう固定的な考え方を、無条件に教育の場に適用することはいけなのではないか。「教育内容」とは、本来流動的なものです。けっして固定的なものでない。だから、その流動性をいかにして教材化するか、今、教材研究ではなくて「教材化研究」が必要な時代になっているのです。それに「教育の方法」について今私達が一番悩んでいるのは、「一斉病」という病気です。教室での、一冊の本、何ページ、何時間扱い（私は何時間扱いという指導案を見る度に心寒い思いがいたします。）―例えば「こんぎつね」十三時間扱いと書いてある。十三時間で扱う子もいるが、八時間ですんじやって子もいる。二十時間かかったって分からない子もいる。だから「何時間扱いとわくを決めてしまうのではなくて、「八時間から二十時間の扱い」としなくてはいいけない。教育の方法上離陸ということは、一斉病のような地平から解放されることです。いろいろな方法を多用

しながら、子供一人一人に即して国語の学習を営んでいくという必要が確認されねばなりません。

大正時代に活躍いたしました千葉命吉という実践的教育学者がおります。千葉命吉の言葉の中で「教科書というものは読むために存在するのではない。それは全部書くために存在している。」という。国

語の読本、名前は読本ですけども作文参考書というふうには千葉は考えていたわけです。この考え方をもうつと広げて解釈して実践していかないと、学習指導要領がいくら表現重視を叫んでも普及は難しいのではないのでしょうか。

教師の修養は表現と話しことばに

教師は読者としての修養はある程度積んでいるかも知れない。けれど、書き手としての修養は殆ど積んでいないと思う。私達先生の学力として今最も不足だとされるのは表現力である。例えば音読の力が十分であるかと問われると、私などは内心忸怩たるものがあるのです。

ことに今学校で指導されてる子供達は、「うまく言え」「まちがうな」「もっとゆっくり読め」「高低をつけろ」「本人の気持ちになつて読め」などというふうな指導されております。けれどもそういう技術的な音読指導は、あまり実り豊かな読み手を作

らないだろう。まず少しでもわかって、より豊かにわかっていなければいけない。自分が一生懸命になって、作者に近づこうとして読む。そういう読みの指導が、もつと学校に導入されていなければ、表現の指導が良くなるまいと思います。

学習指導要領が十二月に公布されます。漏れ聞く所によりますと、どうも国語教育における話し言葉の指導、これが前よりももつと衰弱してくるであろうという心配があるわけです。また、日本の国語教育の中の一番弱い分野というのは語彙だと思っております。―日本の語彙指導は、漢字指導によって代行されているんです。漢字を勉強すれば、何か言葉が覚えてきたことにもなる。そこで、漢字指導をもって足れりとしてしまう。ここに日本の語彙指導不振の根源がある。どういう所から語彙を獲得していくか。明らかに目言葉よりも口言葉から入った言葉の方が強い。活字のインキのしみが刺激して脳みそに吸い込まれるよりは、音声言語ははるかに臨場感のある実感をもって我々を刺激する。従って私達の心にしみ入ったり蓄積されたりすることも確かなんです。

話し言葉というものを、未来に向けてもつと私達教師が関心を持ち、話し言葉の指導体系を確立するため今無きに等しい実践的文獻をいかにして急速に豊かにしていくかという所に努力を傾けねばな

らぬということを離陸への対策として申し上げた次第です。

西尾実先生は、いろんな面で近代国語教育論の鼻祖として考えられておりますけれども、もし今日生きておられたらおなげきになったんじゃないかと思う。それは、自分があれ程言語生活、言語生活重視と主張していた「言語生活」が、だんだん影が薄くなってどうも「言語教育」と言いすぎる。言語生活の基盤は話しことばにある。平俗な言葉の生活俳諧のような「俗談平語を正すこと」がまず必要です。俗談平語という所から出発していった西尾学説。あの三角形の図式（三段構えの国語教育の原理）。西尾先生も話し言葉の問題について関心を高く求められて国語教育の今日の理論的基礎を構築されたのです。国語教育の理論は実家の双肩にかかっています。今日私がお話しておりますようなこんな雑談めいた情報でなく、本物の知恵と情報をあちらこちらから得られて、お一人お一人の皆さんの頭の中で、理論的構築をする必要がある。我々実践家が一ひとりたしかな理論を持たなければ、実践によりかかっただけでは不安で一時間の授業すら出来ないのです。

聞く・読む・わかる

文化人類学者の山口昌男さんの「学校という舞台」（講談社 現代新書）を読むと、山口さんがいかに学習したかという学びの歴史が書いてある。それに「脱教育のすすめ」というタイトルがついた節があります。教育とは破壊だ、向こうが勝つか、こっちが勝つか、一種の対決だ、と書かれています。教育というのはギリギリ切りつめたきつい世界というものが一方にあるのに、現実には、「これから四時間の国語の

授業を始めます」「始めます」とコーラスをして始める授業開きが行われている矛盾、そういうズレをもっと考え直す必要があると思います。願わくは、一人一人の子供がどんなコースをたどって、どういうふうに学習をしていくのかということを私達は知る必要があります。

そのために、「一斉病の病根たる国語教科書の教材文」からの離陸を必要とする。国語教科書の教材文から自由になって、自由な呼吸をしあおうではありませんか。それには、話し言葉を重視することが対策の第一歩だと考えてしかるべきだ。

ことに、聞く力をもっと目標の中に打ち出すことも大事なことであると信じます。

それから、今の国語教室の理性中心―「わかりましたか」「わかった」という進め方でなく、国語教育にもっと感性を持ち込まなくてはいけない。最近の読みの考えの主流の中に読みを行為として考える思潮が強い。日本の伝統的な読みに対する重大なアンティテーゼですね。もともと「へみ」は、歌読みのよみなんだから読む（詠む）とは創ることであるわけです。だから音読は口でよませてはいけません。口だけではつくれない。体でよまなければいけない。そして、なぜなぜ問答を極力圧縮して、子ども達が素直な感動を、作品から全体的な感動として受けることが出来るように、学習指導を進めていくことが肝要なのではないか。

次には「正解到達方式」の打破です。一つの教材文を読んだら必ず一つの正解に到達させなきゃならない、というがんじがらめの発想から自由にならないものである。自由な豊かな発想力の持ち主に対してまで「この主題はこうであるぞ」と、知識で教えたところで、正しい「子供の受容」と言えるかどうか。

か。

学習指導は一つの教材文ということに首をつっこむばかりじゃなくて、多教材、複数教材、同時並行型の拡散教材といったものを導入していかなくやらないと思う。

一番苦手な分野である詩の授業を例にとれば、毎朝、今日のようなさわやかな日には、こういう詩を使って、もうそれでやめちゃう。そのかわり小さな小さな帯单元を沢山展開する、というような試みも、今後の学習指導の開発に必要なのではないかと思います。

まとめ

今日私が許えたかったことは、聞く力をもっと大事にしていきたいということ。それから、感動ある国語教室を今後に期待したいということ。ものを作る、作業すること―全体全体を使って動くという、单元内容で国語教室が満たされておきたいということ。特定、固定的な単一教材でなくて、いろんな多資料、多教材の活用を大事にしていきたいということ。一斉病と言われる、国語教室が陥り易い蔽を、どうして打ち破っていったらいいのかということ。正解到達方式というものの限界を考えなきゃならないんじゃないかということ。ま、その他教材からの離陸に必要な書く働きを尊重し、子供の見方から教材を研究する風習になるべきだということ。これら中心にお考えをまとめてくださることを期待しまして、御清聴を感謝しながら終わらせて頂きます。